
血肉の刃

joker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血肉の刃

【Nコード】

N6893M

【作者名】

joker

【あらすじ】

ゴシックロリータを纏い、片手には常にバイオリンの入ったバイオリンケースを持っている少女。だがそれは外だけ。本当は血肉で構成された、鉄色の刃だった。ホラー×アクション、開幕！

プロローグ

夢を見た 少女の夢。

小さく、美人で、凜とした背中。
黒く派手な服を着て、片手にはバイオリンケースを持っていた。

そして少女はただひたすらに僕の名前を呼ぶんだ。

「晃…晃…」

切なく綺麗な音色のような声。

手を欲する少女に、僕は手を差し出さなかった。

辛さや

心細さ。

切なさや
悲しみ。

感情が涙に変わった時、僕は静かに歩きだす。

切なさを紛らわすように、少女を追ひ払う。

切ない音色。

哀れな音色
。

いつしか僕の間からは、少女への情が
流れていた。

出会い。

ぴびびびびびびっ

目覚まし時計の音で目が覚める。

セットした時刻は6時半。つまり現在時刻は6時30分だ。

「最悪な夢を見たな…」

小さく涙を流す少女から逃げていた。

「無理ねえか」

だってその少女、泣いていたとはいえど、片手に血液の垂れた刃を持っていたから。

カーテンを開け、空を見上げる。

雲ひとつない、快晴だった。

朝食を採り、高校へと向かう俺　鳳春樹。

入学して間もない頃でまだ不慣れではあるが、ある程度のとりまきもできた。

この調子で高校生活は終了する　はずだった。

俺が普通に歩いていると、柔らかいものを蹴った気がした。

…え??

はっとして下を見ると、そこにはゴシッククロリータを纏う少女が倒れていた。

「…は？」

何があだかさっぱりの俺は、きつと幻覚だろうと思い、そのまま通り過ぎようとした、が。

どうやら幻覚ではなかったらしい。

通り過ぎた瞬間、足首を強く掴まれた。

「最近の若者は冷たいな。こんな可愛らしく派手な格好をした少女を放っておくなど、常人のすることではあるまいに」

お前の格好が原因だよ。

そう言おうと思ったが、何か言い返されてしまうような気がしてしまい、言えなかった。

あれ??

こいつ、どこかで見たような気が…。

「ん?おい、貴様、私と会ったことがあるか?」

どうやらこいつも同じことを思っていたらしい。

俺は「さあ」と曖昧に返したが、目の前の少女は「そうか」と納得したように返してきた。

「…!!」

脳内によぎったのは、夢で出てきた少女。

刃を握っているはずの片手にはバイオリンケースが握られているが、姿は、そっくりそのまんまだった。

「まあ、いいか!」

少女は満面の笑顔で言い、俺の手を引く。

「お、おいっ!？」

「ここであつたのも何かの縁。

学校なんてサボって私の買い物に付き合方がいい! 貴様、名は？」

一方通行する少女に名乗る名などない。
だから俺は、名前を偽った。

「オズ」

「オズか。日本人で珍しい名だな」

少女は感心したように言い、再び笑顔で「私は」と切り出す。

「名前はない」

「…ない？」

「私は生きている、が、

私の姿を、皆見ることができんだよ」

寂しそうに言う少女に、俺は何を返したのだろうか。

神の必然。

学校の登校時、俺はこの少女と出会った。

夢で見たあの少女の鏡のように、似ているその黒服を纏う少女。
俺はどことなく不安を感じていた。何か災いが起こるのではないか、
そんな匂いが漂っている。

「おい。オズ君、私はどちらの服が似合うかな？」

服をかざし、猫のように笑む彼女。

俺は適当に黒いネグリジェを指差した。

少女は「そうか」と納得し、選ばれた方の服を戻し、選ばれなかつた服を籠の中に入れる。

「いや、じゃあなんで俺に聞いた？」

「おい」

「なんだい？」

「お前、周りの奴からは見えないんだろ？ だったらその籠とか服とか会計とか金とかどうすんだよ？」

俺が小声で人に聞こえないように言うと、少女はふと笑う。

「偶問だな、オズ君。私に触れたならば、その物までをも見えなくする。心配無用ということだよ」

「……………お前は、人間か？」

不審に思わざるを得なかった。

見えない人間。

触れたものをも見えなくする人間。

そんな人間、いるわけがないのだから。

「ふふつ。滑稽なものだねえ。そうだよ、私が人間だ」

「…ふうん」

そうとは思えないけどね。

「私が人間だ」。随分はつきり言うものだから、否定なんて、出来やしない。

お前が人間なら、お前が見える俺はなんなんだ。

何が人間で何が人間じゃないのか、俺はさっぱりわからなかった。

夢で出てきた刃の少女。

現実で模倣された刃の少女。

バイオリンの少女。

それはまるで神が仕組んだ歯車のように、

ぐるぐると、

ぐるぐると、

音をたてて廻り

出す

。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6893m/>

血肉の刃

2010年10月10日16時08分発行